

---

# 交SPeCu差LaTioN点

樹板 形似太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交SPECu差LaTion点

### 【Nコード】

N3301BA

### 【作者名】

樹板 形似太

### 【あらすじ】

昨日を司る塔に人類は居なかった。血に染まった善人は史上最凶のマゾヒストだった。世界最後の巫女は欲深き守銭奴だった。桃源郷に転がり込んだ人間は番人をしていた。今日も核地雷は笑っていた。使用人は一人で炊事洗濯簿記戦闘を全て熟す。お嬢様は屁理屈を捏ねるのがお上手。そんな七人が営む『便利屋』は今日もいつも通りの異常運転。その内、表紙が出来ると思います。

## プロローグ 『眷属募集』

「お嬢様、本当にまだ募集される御積もりですか？」

「くどいわよ月蝕。見付からないんだから仕方無いじゃない」

「ですがこれ以上続けては直に女神ノ複尾キマイラテイルに勘付かれる危険性が」

「はあ……なら何？ 月蝕が一人で囁行者全員を相手にするのかしら？ 殺菌士協会と帝国騎士団が総力を以てしても太刀打ち出来ない尻尾、一人で両断出来て？」

「……………申し訳、ありません」

「別に怒ってる訳じゃないのよ月蝕。顔を上げて？ 貴方は強い、それこそ尻尾の一本位なら余裕で断ち切る事だって出来るはずよ。でも、一本じゃ駄目なのは分かるわね？」

「……分かります。ですが、ですが言わせて下さい。これ以上は奴等に勘付かれます、最低でも後二・三回で見付けなければいけません！ 可能ならば次で！」

「はあ、だから」「私はお嬢様の忠実な使用人です、お嬢様を危険から遠ざけ守る義務が有ります！ 例え募集を打ち切って私一人で戦う事になろうとも、その方が延命出来ます。ですからっ！」「分かった、分かったから……もう、そう興奮しないで頂戴」

「失礼致しました」

「じゃあ話を戻すけど、次は一体どんな人間を招待するのかしら？ 危機感を感じているなら月蝕もそれなりに考えたんでしょう？」

「それはもう、読み上げます。昨日塔ノウンの管理人、血染めの善人、世界最後の不良巫女、桃源郷異例の番人、笑う核地雷の計五名に求人票を送りました。現実世界ですともう気付いている頃合いだと思います」

「何時にも増して個性豊かなキャラクターばかりで期待は出来そうだけど、昨日塔の管理人に術が掛かるかしら？ そもそも求人に乗るかも怪しいわ」

「恐らく掛からないでしょう、そして乗るかも微妙です。ですが合格ラインに達している事は間違いないありません」

「それはそうだけど、ふふ」「どうかなされましたか？」

「いいえ、月蝕もいよいよ必死と思うとついつい笑いが……ふふふ」

「お嬢様、他人事の様に言わないで下さい。私、一昨日から食事が咽を通らないのですから」

「あら、それはいけないわね。コックにもっと美味しい物を作る様に言っておかないと」

「炊事洗濯掃除からお嬢様の身の回りのお世話まで全て私がしている件について、その言葉をどう取れば良いのでしょうか」

「どう取っても良くてよ？ 今日七面鳥の丸焼き檸檬添えを食べたい気分なだけよ」

「……………今から市場に出向いて買って来ましょう」

「そうして頂戴、私はそろそろ寝るわ。昼寝は竜の性質だから」

「お休みなさいませ、お嬢様」「ええ、行ってらっしゃい月蝕」

## 幕間 1

濃厚な紫の絵具を塗りたくり、その上に爪楊枝で白を点々と付けていった様な満天の星空。今宵は新月、月は仕事をサボタージユし、その皺寄せを星々が担っているのだが、何千何万と彼らが輝いたところで夜の闇は深い。

時刻は深夜二時を過ぎ、夜行性の動物と一部の人間以外は眠りに就いているであろう時分に、未だ齡二十歳に届かない少年は快楽に溺れ転がっていた。

「アッ、ハア……クツ。良い、気持ち良いなあ。まるで俺の為に在るのかと思わせる場所だ。そうは思わないかい、皆？」

転がる度に薄く、決して致命傷にはならない程度に切り刻まれる露出した肌。

転がる度に淡く、愉悦に吐息を漏らし常人には理解出来ない快楽に溺れる少年。

着ているのはカッターシャツにスーツズボンと、宛ら新社会人と見て取れる服装の彼だが自身の体に走る無数の傷から流れ出る血にそれらは真っ赤に濡れており、宛ら人何人かを殺してきたマフィアのような。

雪にも負けない真っ白な髪も所々赤黒く、切れ長の銀の瞳を携える整った顔もガーゼや絆創膏、新しく出来た生傷だらけという有り様である。

「それにしても暇だなあ、出血多量で死にそうだ。退屈は人を殺すって言う格言も強ち嘘では無いね、昔の名言職人さん達には恐れ入ったよ」

独り言を楽しげに話す少年は、リップリーフという名称の鋭利な草が生い茂っている草原の端、何も生えていない禿げ地に転がり着き、「よっと」と短く息を吐いて起き上がった。

「ねえ皆、凄く唐突だけど世界は楽しかったかい？」

刃の原一面は、肉が焼け焦げた臭いと鉄の臭いで充満していた。  
その内の一つは、血だ。

だが、もちろん少年の流した血液では無い。彼一人の血を全て抜き取ったとしても、吹き抜けの大地ではこれほどはつきりと残らない。明らかに体に害が有りそうな程、気の弱い者なら嗅ぐだけで卒倒するであろう程に、そこは死臭に包み込まれていた。

「楽しかった？ 苦しかった？ 喜怒哀楽溢れる豊かな人生を送れたかい？ 気持ち良いことやその逆も余す事無く全て味わえたかな？」

少年は腕を広げ、何年か振りに会う恋人を待ち合わせ場所で見付けた時のような満面の笑顔で星空を仰ぎ、くるくるくるくると回り始めた。

「輪廻転生とかっていう実にご都合主義な考え方は実際には有り得ないんだ、人間も動物も微生物だって人生は等しく一回きり、それが百歳までの大往生だったとしても親の健康状態に因る死産だったとしてもさ。そんな人生だ、正しく産まれ落ちたなら、楽しみ尽くさなければ損だし、いざ楽しみ尽くそうとしても楽しみは無限大に存在するんだ。端金の為に死ぬなんて勿体無さ過ぎる。俺は皆にそう言っただよな？」

少年が転がった場所に、彼の血で作られるはずの赤い軌跡は存在していなかった。特段彼に特殊能力が有る訳でも、闇夜で見え難いという理由では無い。

元々、少年が居る草原一帯は紅く塗りたくられていた、それだけの話なのだから。

「仲間がいれば、仲間と力を合わせれば困難を乗り越えられる、どんな強敵にだって必ず勝つチャンスは訪れる。そんな勇者妄想を人間は抱きがちだけど、それは愚かな事この上無いと思うんだ。自然界を逞しく生き抜き、少しでも危険を感じたら生存本能で即座に逃げ出す野生動物の方がよっぽど賢い、比べるの自体が失礼な位にね。その点、途中で逃げ帰った何人かは賢明だと思うし自分の判断を誇

っていいと思う。で、俗に言う勇者な君達の人生はこんな所で終わっても悔いの無い、満ちに充ちたモノだったのか？」

指の本数では足りない、何十何人という人体が草原のリッパリーフを押し退けて不規則に倒れていた。どれも既に死体であるのは間違いなく、軽い者ならば鎧を突き破られ胸に風穴を開け、酷い者ならば元が人だったかも分からない惨状で、全員焦げている。

「死体に説法なんてオカシイと思うかもしれないけどさ」

少年は回るのを止め、一瞬だけフラつくもしっかりと両足で地面を捉え、草原を見渡す。

「君達、死なないと黙って俺の話聞いてくれないから」

少年はニヒルな微笑みを顔に浮かべて新月を仰ぐ。自身に纏う己が血を抜くと爽やかな好青年に他ならない。

そんな彼の脇を一陣の湿気を含んだ生温い風が吹き抜け、その濡れた綺麗な白髪を弄んでいた。彼はこの風を酷く愛していた。

「だけど人を殺した罪を俺は軽んじないよ、自殺志願者だった君達の分まで……俺はこの世界を楽しむよ」

少年は、ズボンのポケットから一枚の半紙を取り出した。

## 幕間 2

彼女は一五歳という若過ぎる年齢にも関わらず、並の人間ならば何十年も掛けて修業した後にようやくその一端を掴めるという、高度な魔力運用を要す符術の使い手……符術師である。その才能は神に愛され頭脳も明晰、そんな彼女が一つだけ無い物があつた。

「今日も空っぽ」

まだ朝日も昇っていない、東の空が僅かに白んでいるだけの早朝。箒と塵取りを手に握り、少しだけ皺が寄つた紅白の巫女服で体を着飾っている少女は社の手前に置かれていた蓋が外された賽銭箱の中身を見て悲痛に顔を歪めた。年相応に張りのある肌、肩口に掛かる位の髪と若干釣り目気味の瞳は漆黑にして純粹だが、何処か疲れているのが見て取れる。

「はあ……お金欲しい」

彼女に無い物、それは金銭であつた。

現世で最後の神社と謳われている此処、美影神社の一人娘である彼女はそれ、貧乏なのだ。信仰は仏から神に移行し終わっており、実際最後の神社と言う謳い文句はプラスでも何でも無い。幾ら符術の才に溢れている彼女でも其ればかりは仕方が無い、家業に恵まれなかつたのだ。

しかし、両親が他界してから早数か月、いつもならば彼女はこの後賽銭箱の蓋を元に戻して掃除をするのだが、今日は違った。

「参拝者も居ない、神社はボロボロ、自宅は可燃性」

彼女の中には一つの決心が芽生えていた。

毎日清掃しても彼女しか歩かない石畳、神社の骨組みである木の内部は湿気で腐っていて何時何時折れてしまつか分ならず、境内の隅に建っている彼女が寝て起きてご飯を食べるだけの長屋は簡素な板で作られている為マッチ一本で大火事になること必至だ。

「お父さんお母さん、浄歌は一身上の理由で巫女を止めようと思ひ



ます！」

パンパンツと手の平を打ち鳴らしてペコリと一礼、総じて神前でするには不適切な発言を少女は堂々と言い捨て、少女は箒と塵取りをその場に投げ捨てて一目散に長屋に駆け出した。

少女が横開き式の扉をバシンツと豪快に開け放って中に入った。ドタドタギンギシと長屋全体が揺れ軋み、崩壊まで秒読みかと思われる状態が奇跡的に数分間続くと、中から再び少女が出て来た。

「忘れ物ナーシ！ 戸締り機能ナーシ！ 盗まれて困る物ナーシ！」  
満載され許容限界以上に膨れ上がったリュックサックを背負った少女は意気揚々と悲しい点呼をする。

何処から引つ張り出してきたのか、大凡この山奥の土地を含めた神社の全資材を売っても買えない耳飾りを少女は両耳にぶら提げている。純銀で単純な意匠ながらも精巧に作られており、ワンポイントの青く澄んだ輝きを持つ宝石も加味すると相当高価な品になるであらう。

だがしかし、そんな高価な宝石がくすんでしまう程に巫女服とリュックサックは不似合いであり、更に何処へ行く気なのか少女は境内隅に放置されていた錆の目立つ自転車に跨った。不似合いを遥かに通り越してシニールである。

「じゃあ、出発！」

少女は最初とは打って違う明るい笑顔を顔に、わざわざ乗った自転車のペダルを一切漕ごうとせず、に巫女服の袖から一枚の半紙を取り出した。

### 幕間 3

『レディース&ジェントルメン！ 今宵、私達は伝説を見ようとしている！ 白狂が謎の引退をし、我々の前から姿を消して早二ヶ月、狂人は一体何を悩み何を考えていたのかは闇の中……しかし、私達にはまだ彼が居る！ 二ヶ月前のあの日、白狂との一時間に渡る激闘の末にドローに持ち越した彼が！ 長き療養を経て再び場内に舞い戻るのです！』

周囲は異様なまでの熱狂に包まれていた。直径百メートルは下らないグラウンド、観客総立ちの客席に外壁を含めばその倍にはなる円形の建物にて司会者らしき濃いサングラスを掛けた金髪中年のマイクパフォーマンスが冴えに冴える。

此処はガリーマル共和国の西の外れ、都市ワグーン中心部にある大闘技場。夜であるにも関わらず照明で闇は払われており、夜空は隅へ隅へと追い遣られていた。

『ではあ、今夜の哀れな生贄となってしまうのか、将又期待を裏切る大勝利を収めるのかが見物な青コーナーから紹介致しましょう！ その昔は殺菌士協会の魔獣両断者として畏怖を集め、今や殺菌士協会の生温い方針に嫌気が差し、闘技場でその手腕に物を言わせフアイトマナーを貪る闘人……重砕剣のゾディグ「マグリガアア！」』

司会の男が天高らかに声を張り上げると同時に閉ざされていた南側の鉄柵が上部へ跳ね上がった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおー！」

獣の如き雄叫びと共に場内に現れたのは、総重量七〇キロを越すのが一般的な本来岩を砕く為の工具として使われていた工具を改良した重剣を堅い地面に砂埃を巻き上げて引き摺る大男であった。観客の中の何人かは彼のファンが居るらしく応援の声が向けられているものの、他九割は野次や嘲笑の類である。

『続きましては本日の主役！ その戦闘スタイルは白狂に勝らずと

も劣らない純粹な格闘術！ 魔術を一切使わない事から恐らく今は希少である非魔含者……しかし強い！ しかし優雅！！ 彼を止める存在はこの闘技場に居るのだろうか！？」

ゾディグなる男への野次を完全に忘れ、観客達の間で最強コールが沸き起こる。

『では登場して頂きましょう！！ 赤コーナー……』

司会者が一旦息を溜め、空気を焦らす。同時に闘技場の周りから何本もの白い煙が尾を引いて撃ち上がる。

『笑う核地雷いいい！ 歩振鍔花あああああ！！！！』

連続して無数の丸い色取り取りの花火が夜空に咲き誇り、せつかく撃ち上がったそれを掻き消さんばかりに空気が踊る、躍動する。人々は狂い、最強に代わって歩振コールが巻き起こり、いざ鉄柵が上げられるも、なかなか其れらしき人物は現れない。焦らす、焦らす。

鉄柵が上げられて一分後、まだ熱は冷めずに人々は発狂総立ち。五分後、流石に冷静になった何人かが気付き始める。十分後、すぐに闘技場で暴動が始まった。

その日を境に、笑う核地雷は闘技場から姿を消した。

かくして、予定通り今回の就職希望者が揃ったのだった。

## 幕間 4

僕、石角丸宗兎かりゆつ そとこは名前も大概だがとても特殊な仕事をしていた。

この世に生を受けて早十七年と幾何、物心付く頃から今は亡き父の影響で剣の道に入り、他の子供達がまだ公園なんかで賭け回っている頃にはこれまた今は亡き母の影響で魔術の勉強を始めていた。

時代は剣や銃といった前世代的な戦闘方式から魔術へと移行し始めていたからだ。そんな英才教育と取れない事もない幼少期から反抗期を過ごした僕は実に嫌な風習で両親を亡くしてからも必死に努力を続け、遂には一五歳の秋に史上最年少というレッテルを貼られつつも帝国騎士団入団試験を合格し、それを蹴った。

「全く以て若いって良いねえ」

「若い？ 若いかわくなくいかで言ったら年齢的には酒類も飲めないし賭博も出来ない様な数だけど、それはアンタだって同じのはずだよな……バルソープ帝国領地に駐屯していた帝国騎士団述べ一二五名を二時間足らずで焼殺させた大陸指名手配犯、にじゅうご 十々十さん」

そのまま帝国騎士団に入っていれば今頃には結構上の階級まで、せめて尉官位にはなれていた自信がある。だがしかし、僕も若かったんだ。発症の平均年齢は一四前半、僕には世間一般より少しだけ遅めの反抗期が訪れた。『僕は最強なんだぞ？ こんな小さい所に収まってられないね』と、自分から試験を受けに来た餓鬼が意気揚々と騎士団長の面前で言い放ったのだ、どうかしてたと後悔してるし全身から火を吹きそうな程恥ずかしい過去だ。それ以前に僕は今になっても剣士が働くに於いて騎士団以上の職場を知らない、本当に何がしたかったんだろう。

「色々と上澄み部分を良く知ってるみたいだね。君みたいな剣士に覚えて貰えて至極光栄、とでも言うべきかな？ 本当ならお互いジューズでも飲み明かして戦闘について語り合いたい、それこそ色恋沙汰の話で盛り上がるのも悪くない」

「奇遇だな、僕はその真反対の気持ちだ。犯罪者と和氣藹々と夜を過ごす心算なんて無い」

そして僕は世界を放浪した。森や街道に現れる猛獣や山賊の類を討伐して得られる僅かな報酬で食い繋ぎ、また金が尽きては殺菌士協会が近くに無い町で依頼を受けて達成し食い扶持を稼ぐの繰り返しだった。拳句の果てに迷い込んだ樹海で合度が異常に高い複数体の魔獣キメラに襲われて瀕死の重傷を負いながらも命辛々撃退し、その場で倒れ込んだんだ。本当ならそこで息絶えて魔獣の餌になっても不思議じゃなかったんだが神様って奴は存外僕の事を嫌ってないらしく、僕は拾われたんだ。

女性しか住んでいない幻の里、桃源郷に。そして手当を受けた僕は雇われた、男手が無いのも面倒という理由で桃源郷が出来て以来初めての門番として。

その感想を一言で表すと、暇だった。

「別に俺は悪い事した心算は無いんだけどねえ。元々戦闘は趣味程度だし、それこそ人殺しなんて好きじゃない。ああ、でも矛盾しちゃうねそれだと。訂正、俺は人殺しが好きみたいだ。現に今、無性に人を殺したい。腕を競いたいとかじゃなく、純粹に殺したい。君の好きな物を粉々に砕いてあげよう、だから君は僕の好きな物を壊して良いよ。君の大切な物を全部焼き尽くしてあげるよ、だから君は……遠慮せず僕を殺して良いんだよ？」

「奇遇だな、僕もそれと同じ気持ちだ」

『男子禁制』……桃源郷で親殺しの次に重い刑罰のせいで村の入り口にはば一年間、少量の給料と一週間分の保存食料を支給してくれる村長たるオバサンとのコンタクトだけで、一年間だぞ？ 村に来る悪者なんて一回も現れなかったし、そもそも魔獣の巣窟である深樹林だ……並の人間なら普通に食われて死ぬ。助けてくれた恩義は確かに胸にあったが、それを差し引いても僕は此处で何してるんだろって疑問が頭の中を数千回は行き来したし、何故か魔獣は桃源郷に近寄らないしで、もうね、暇過ぎて発狂しそうだった。

鬱蒼と木々が立ち並ぶ森の中でポツカリと空いた空間、そこは目の前の狂人が放つ殺気で充実していた。全身の肌がヒリヒリと痺れる、一瞬の隙は直結して死に繋がるであろう緊張感……僕は少ないながら何度かこれを経験した事がある。

「今日は何て気分が晴れやかなんだろう、新しい快感の記念として特別に選ばせてあげるよ。殴り殺されるのが良いか、焼き死ぬのが良いかを」

今は未だそんなに流通していないカッターシャツの半袖と黒のスラツとしたスーツボンを文句の付け所が見当たらない位に着こなす十十は同性の僕ですら綺麗と感じる白髪を掻き上げて爽やかに笑う。

黙って狂気を消せば異性にモテそうな顔立ち、細いながらも引き締まった筋肉が見て取れる四肢、それら全てに何故か所狭しと絆創膏やガーゼが貼られている。パツと見、色んな意味で重症な奴だ。

「気分が良いならもう一声、？僕の愛刀で切り捨てられる？か？僕の魔術に跪いて地面を舐める？も足してくれるか？」

「ハハハハハ、勇者は嫌いだけど……猛者は大好きさ」

十十の体勢が低くなったと思った次の瞬間には、もう目の前まで距離を詰められていた。

一瞬にして間合いを殺された、僕は落ち着いて十十の攻撃に対処しようとするが、何も分からないまま吹き飛ばされた。圧倒的なスピードの差、武器も鎧も纏っていないのは一見ハンデに見えるが、全然そんな事はない。魔術や拳闘でいくらでも覆される。

派手に吹っ飛ばされたが大してダメージは無い。どうやら攻撃と言うよりも牽制の意味合いの一撃だったんだろう。僕は木の側面に足裏を付けて踏ん張りと跳躍をほぼ同時に行い、鞘から五年以上の付き合いになる愛刀を走らせて十十に斬り掛かった。

「な　！」

「僕に剣なんて効かないよ？」

片刃という特殊な形状である刀を剣と称されるのには慣れたが、

振り下ろした刀身を指二本で挟まれたのは初めてだ。こいつ人間じゃないのか？

勢いは殺され、地に足を付いた僕は尚も両手で力を込めるもピクリとも動かない。

「魔力反転か、初めて見た」

「ん、反転作用を知ってるんだ。さっきの魔術で跪かせるっていう発言も加味すると魔術剣士ってところかい？」

「直接目で確かめたら良い！」

押して駄目なら引いてみる宜しく、僕は柄を強く握って思い切り地面を蹴って後ろに飛び上がった。案の定、刀身は指の隙間をすり抜けた。柄を素早く鞘に戻しながら身を翻して掌を地面から僕を見上げる十へ。

「アイシクルレイン！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3301ba/>

---

交SPeCu差LaTioN点

2012年1月8日21時47分発行